第１４回歯科プレスセミナー
協会説明概要

「歯科医師」の現状

歯科医師へのニーズの高まり

日本私立歯科大学協会 専務理事
神奈川歯科大学 学長

櫻井（さくらい） 孝（たかし） 氏

●歯科医師は約 10 万 7 千人。人口 10 万人当たりでは 85.2 人で世界では中位

いま、歯科医師の 4 人に 1 人は女性です。若い世代ではもっと多く、歯科大学・歯学部では学生に占める女性の割合はおよそ 4 割、歯科医師国家試験での合格者でも 4 割以上が女性となっています。

私たちは、より多くの優秀なリケジョに歯科医師を目指して欲しいと考えていますが、その目指すべき歯科医師が現在どのような状況にあるのかについてお話ししていきます。

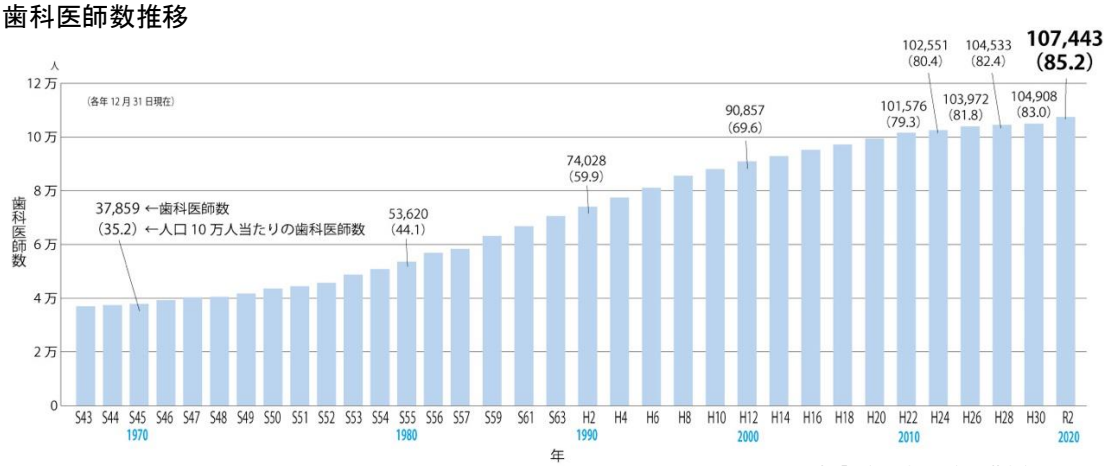
昭和 40 年代から 50 年代にかけて「虫歯の洪水」といわれていた時代、歯科医師は全体的に収入が高く、やりがいもある職業なので、医師と並んで憧れの対象となっていました。

ところが現在では、歯科医師は「なりたい職業」の上位にあげられるような人気の職業とはいえなくなっています。その理由と、歯科医師は本当に魅力に乏しい職業なのか、その現状を見ていきます。

現在、歯科医師の数は約 10 万 7 千人です（図 1）。人口 10 万人当たりの歯科医師数は 85.2 となっています。この数は果たして過剰といえるのでしょうか？

世界の中で見てみると、人口当たりの歯科医師数の比較では、日本の歯科医師数は OECD 加盟 38 国の中で 19 位。決して多い国ではなく、歯科医師が過剰だとはいえません。

図 1 歯科医師数推移



厚生労働省「医師・歯科医師・薬剤師統計」

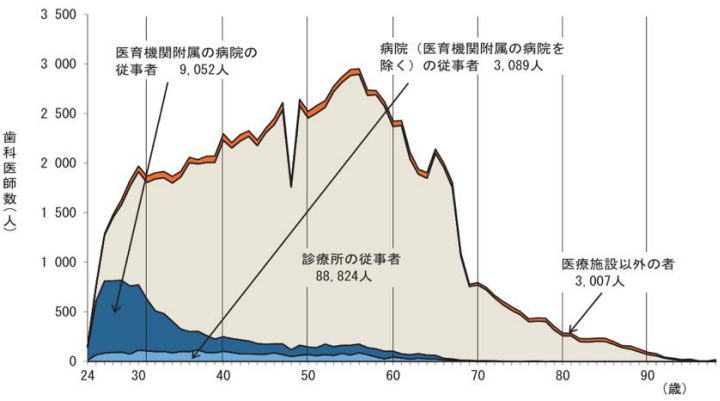
●進む高齢化。歯科医師の半数以上を占める 50 歳以上が今後大量にリタイアすると歯科医師不足に

歯科医師の年齢を見ると、歯科医師の供給が減少したことにより、50 歳以上（50 代、60 代、70 歳以上）が既に半数を大きく超え、平均年齢は 54.3 歳で、年々上昇し続けています（図 2）。

歯科診療所の開設者に限って見ると 60 代が最も多く、50 歳以上で全体の 3/4（77.1%）、60 歳以上が約半数（46.8%）を占めています（図 3）。自身がリタイアした後に家族や知人等が歯科診療所を継ぐ予定があるかどうかのアンケート調査では、歯科診療所の 9 割で継承が決まらない現状にあります。

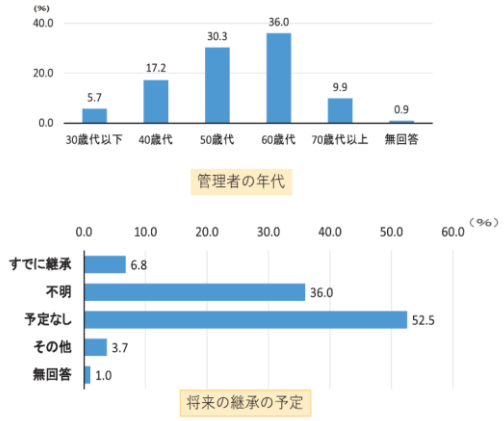
ボリュームゾーンである 50 代、60 代の歯科医師が 70 歳あるいは 75 歳で大量にリタイアすることを想定すると、数年後には就業歯科医師数は激減することが予測されます。

図 2 歯科医師の従事する施設種別・年齢別構成



出典：日本歯科医師会　歯科口腔保健・医療に関する動向より

図 3 歯科診療所管理者の年代及び将来の継承の予定



地域包括ケアシステムにおける「かかりつけ歯科医師が果たす役割と今後の働き方等」（2020 年 3 月）に関する調査　日本歯科総合研究

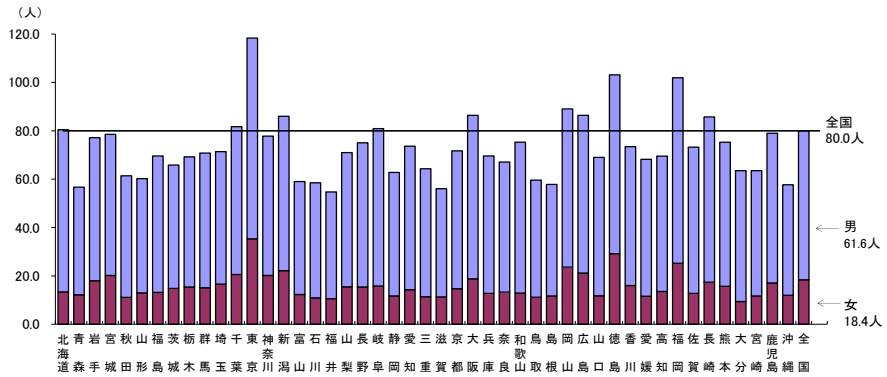
●歯科医師の 9 割は全国に約 6 万 7 千ある歯科診療所で地域口腔保健に貢献。ただし偏在が問題に

歯科診療所の数は 2023 年（令和 5 年）で 67,269 施設です。近年は減少傾向にあり、その多くは歯科医師の高齢化などによる廃業と考えられ、ネガティブ報道でいわれているような歯科診療所のいわゆる「倒産」は極めて稀なケースといえます。帝国データバンクによると、2021 年に歯科診療所 6 万 8 千施設のうち、倒産したのはわずか 10 件でした。

10 万人の歯科医師たちの約 9 割は歯科診療所で地域口腔保健に貢献しています（上の図 2）。残りの 1 割は病院で働いています。

一つの大きな問題点は、歯科医師が人口の多い大都市圏に集中するなど、かなり偏って存在している点です。都道府県別に人口 10 万人当たりの歯科医師数では、トップの東京都が 122.8 人なのに対して、滋賀県（59.3 人）、沖縄県（60.3 人）など多くの県で東京都の半分以下となっています（図 4）。全国には歯科医療機関がなく、簡単には歯科医療を受けられない地区（歯科医療過疎地区）が 1,200 以上もあります。

図 4 都道府県別人口 10 万人対歯科医師数（2020 年）



厚生労働省「医師・歯科医師・薬剤師統

●高齢化の進展で歯科ニーズが拡大

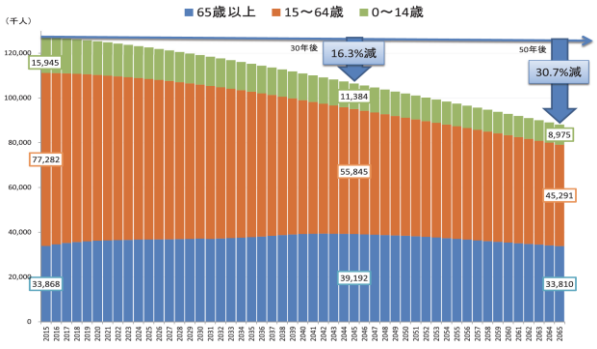
日本人は長生きをするようになり、15 年も前に超高齢社会に突入しました。ただ、平均寿命と健康寿命の差、つまり、寝たきりなどの要介護状態の期間が男性で約 9 年、女性では 12 年もあるなど、歯科を含めた医療にも高齢者に向けた新たな対応が求められています。

8020 運動などの成果により、2016（平成 28）年には 80 歳の人の二人にひとりは 20 本の歯を保つようになりましたが、高齢者の歯が多く残るようになったことで新たな問題も生じています。歯が無ければ気にする必要もなかったむし歯や歯周病を予防するため、残した歯をきちんと管理することの重要性が飛躍的に高くなってきました。

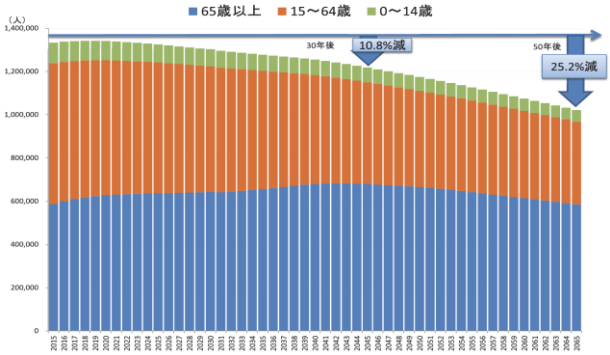
寝たきりの患者や様々な障害を発症した患者では、食べ物を噛み、飲み込むという、一般の方には当たり前と思われるようなことができなくなっているケースも多く、超高齢社会では、この "摂食嚥下"といった歯科治療のニーズが拡大しています。子供のむし歯は減っても高齢者で新たな歯科のニーズが非常に高まっているのです。

今後の人口減少に伴い歯科診療所の患者数も全体的には減少が見込まれますが、高齢者数の増加や高齢者の歯科需要の高まりなどを受けて 65 歳以上の患者数は 2045 年ごろまで増加していくことが予測されています（図 5）。

図 5 今後 50 年後までの人口推計（左）と歯科診療所患者数推計（右）



国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成 29 年推計）」より日本歯科総合研究機構作成



国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成 29 年推計）」および厚生労働省「患者調査」より日本歯科総合研究機構作成

●要介護高齢者は歯科医療を受ける機会が極端に制限される

高齢者の健康長寿のためには、寝たきりなどの要介護状態とならないように、様々な健康リスクを管理・低減していくことが大事です。これらは歯科とは関係のない医科の領域のように思われるかもしれませんが、口腔の健康は認知証、脳卒中、心臓病、糖尿病、肺炎など要介護状態を引き起こす多くの疾患と密接に関わっていることから、歯科医師は介護予防にも大きな貢献ができるのです。

口腔の健康維持は国民の健康を増進する上でとても重要なのですが、現状では歯科医療を受けられない高齢者がたくさん存在します。歯科では、患者が病院・診療所に出向いて受診することが基本なので、高齢者が要介護状態になると歯科医療を受ける機会が極端に制限されてしまいます。

要介護高齢者 290 人への調査で、6 割以上の人が歯科治療を必要としていましたが、実際に治療を受けられた要介護高齢者はわずか 2.4％に過ぎなかったことが報告されています。

●歯科に望まれるニーズに応えて「歯科訪問診療」をするには、歯科医師が足りない

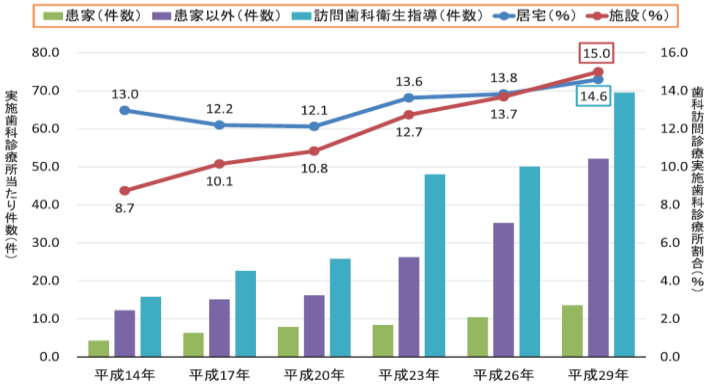
歯科医療を受ける機会が制限されている要介護高齢者などのもとへ歯科医師等が出向いて診療を行うのが「歯科訪問診療」です。

超高齢社会を迎え、要介護状態の高齢者を自治体や医療、介護などが一緒になって地域で支えていこうという地域包括ケアシステムの構築が急がれていますが、その中で歯科医師は口腔ケアや摂食・嚥下リハビリテーションなどで高齢者の食と健康を支えるという重要な役割を担っており、歯科訪問診療で大きな役割を果たすことが期待されています。

ところが、こうした新たに生まれた歯科の需要に応えていくためには、圧倒的に「歯科医師が足りない」のです。歯科訪問診療は徐々に広まり、現在、歯科診療所の 15％程度が歯科訪問診療に取り組んでいますが、歯科医師側か

らすると、なかなか手が回らないのが実情です（図 5）。また、歯科訪問診療の取り組みが進んでいるかどうかは、都道府県によって大きなバラツキが見られます。

図 5 居宅・施設別の実施歯科診療所割合と実施歯科診療所あたりの実施件数経年推移



日本歯科総合研究機構作成

●むし歯を治すだけじゃない！新たに広がる歯科医師の領域

歯科医師の仕事は年々多様化しています。以下はその一例です。

■災害歯科／大規模災害の被災地などにおいて口腔ケアで誤嚥性肺炎（災害関連死）を防ぐ活動を継続して実施しています。歯科医師が国民の命を直接守ることに貢献しています。

■摂食・嚥下リハビリテーション／年をとったり病気や事故で物を食べる機能が衰えた人に対して、自分で噛んで食べられるようにトレーニングをするものです。自分で噛んで食事ができるということは人生の大きな喜びであり、そのサポートをすることで国民の QOL 向上に重要な役割を果たしています。

■睡眠歯科／マウスピースなどの口腔内装置を使って睡眠時無呼吸症候群やいびきといった睡眠呼吸障害を治療するものです。不眠の原因には歯並びや顎が関係することがわかっていて、日本人の国民病ともいえる不眠の解決に向けて歯科医師が貢献しています。

■インプラント／抜けた歯の代わりにチタン製の人工歯根を埋め込み、その上に義歯を装着するものです。最も天然の歯に近い修復法として普及が進んでいます。

■顎関節症／若い人に多い症状で、口を動かすときに顎がガクガクと鳴ったり痛んだりします。顎の矯正やトレーニング、マウスピースなどによる治療のほか、ストレスも一因となるため、日常の生活指導なども行なったりします。

■再生医療／事故や病気で失った歯や歯周組織を再生させようという取り組みや、歯髄細胞を幹細胞として使い、あらゆる組織の再生に役立てようというような 2 つのアプローチがあります。歯牙の再生は動物実験では成功していて、歯周組織の再生はすでに普及段階です。

■地域や行政でも活躍／学校歯科医、産業歯科医、警察歯科医、歯科医官（自衛隊）、行政・保健所歯科医師など、地域や行政の様々な場所で歯科医師は活躍しています。

■様々な医療のキーパーソンとして／近年は医科と歯科の連携が推進されていることもあり、従来の枠組みにとらわれない幅広い領域（口腔外科、歯科麻酔科、スポーツ歯科 等）で、口腔のスペシャリストとしての専門性を発揮している歯科医師もたくさんいます。

●歯科医師はやりがいがあり安定性も高い生涯続けられる仕事

■就職率 100%！／開業も含め、歯科医師の就職率は 100%です。歯科医師の求人は多く、私立歯科大学・歯学部への求人件数は 8.7 倍以上（図 6）。「歯科医師国家資格」は大変心強い資格といえます。

図 6 私立歯科大学・歯学部卒業生への求人状況（2022 年 3 月卒業）

【件数ベース（14歯学部）】

卒業生数	求人件数	求人倍率
1,181人	10,301件	8.72 倍

【人数ベース（6歯学部）】

卒業生数	求人人数	求人倍率
574人	7,321人	12.75倍

一般社団法人
日本私立歯科大学協会調べ

■生涯続けられる仕事／歯科医師免許はライセンスの更新や定年のない生涯有効な国家資格です。自分でリタイアする時期を決めることが可能であり、歯科医院で働いている 70 歳以上の現役歯科医師が 1 万人以上もいます。

■国民の健康と QOL 向上に直結したやりがいの高い仕事／食べる、話す、息をするなどといった、生きる上で大切な機能を持つ口の健康を支えるのが歯科医師の仕事であり、子供から高齢者まで、口の健康を維持・改善することで健康と QOL の向上に貢献できます。治療によって目に見えて患者の QOL が改善されるため、多くの人から感謝されることが多い職業でもあります。

超高齢社会に対応するため、歯科医師へのニーズは高まっています。高齢者の口腔機能の維持・管理、改善や全身の健康管理までを行い、さらには地域での介護・医療の一翼を担いながら歯科訪問診療などを行っていくには、歯科医師数は現在でも足りていませんし、今後はもっと不足していきます。

歯科医師の実情や魅力を中高生の皆さんやメディアの方たちにもっと知っていただき、やりがいを持って歯科医師を志望する若者が、女性を含め増えていってくれることを切に願います。